

『正風発句大概』雑考

一 はじめに

私の架蔵本の一冊に『正風発句大概』なる俳論書がある。『国書総目録』をひもとくと、

正風発句大概 しょうふうは 一冊 頼俳諧 〆槐亭

風悟 〆天明六刊 〆旧三井（「発句大概」） 〆

天明六版——柿衛・天理 綿屋、寛政元版——東大酒

竹・大阪府・松宇

と記されている。『古典籍総合目録』によれば、右の諸文庫、図書館の他に、岐阜市立図書館に、天明七年の写本が一本蔵されている由である。内容からして、重宝され、よく読まれた本ではないかと思われるが、伝本は、あまり多くはないようである。

まずは、架蔵本の書誌を記しておく。

『正風発句大概』。大本（縦たて二十六・七センチ、横十九センチ）

一冊。本文、全七丁。巻頭の一丁（遊び紙相当部分）には、表に「発句大概」の文字を中央に、右に芭蕉、左に

復ふく 本もと 一いち 郎ろう

梅に鶯の絵が描かれており、裏に「槐主乃春緑」の文字を中央に、右に竹、左に槐えんじゆの絵が描かれている。また、表には「須佐笠松文庫」の朱色の蔵書印が上部右寄りに捺されている。表紙は、はなだいりふだいせん 縹色。題簽は、原題簽で、子持ち梓付短冊白紙（縦十八・三センチ、横四・二センチ）、表紙中央に貼付、「正風発句大概」。刊記、「書林 京寺町二条 橘屋治兵衛」。刊年は記されていない。

次に、本文一丁の表裏に見える序文を翻刻してみる。句読点、濁点、振り仮名等を私に加える。又、現行の字体に改める。翻刻は以下、同じ。

序

槐亭かいていに地獄ぢごく管くだんといふものあり。若もし、此箱このに入いるものは、ふたゝび出いることかたしとぞ。ことし孟蘭盆ぼんの日、たまゝ其蓋そのふたのあきたるを見れば、所々より添削を乞ひ、口弁を求る発句、附合の巻々、詩賦、文章の数々、みづからのをも打込れたるが、其中に発句大概と題して筆を拭ぬぐへる草稿あり。さるは彼詠歌大概

に比して設たる名なるべし。先は此書の短簡にして、しかも教の親切なる、いまだ斯のごとき物を見ず。まことに砂石を穿て、金玉を得たりといはむ。依て校合して、是を治兵衛に授け畢ぬ。惟時天明丙午の秋、紀府、紅蓼舎の風察書。

紅蓼舎
風察

これによって、『正風発句大概』の概要を窺知することが出来る。

著者は、「槐亭」。平林鳳二・大西一外著『新選俳諧年表』（大正十二年、書画珍本雑誌社刊）を繙くと、文化十二年（一八一五）の項に、

▼槐亭歿、七月十四日、享年八十四、松尾氏、名隆弘、称三七、風悟、木鶏子、欠伸子と号す、紀州藩士、五筑坊門。

と記されている人物であろう。『正風発句大概』本文巻頭に「発句大概 松風後述」とあるのは、松尾風後述の意であろうから、風悟は、「風後」とも表記されて（称して）いたことを知る。「槐亭」も、槐亭とも表記されていたのであろう。近刊の『柿衛文庫目録』（平成二年、八木書店刊）が『正風発句大概』の著者を「槐亭松風」とするのは誤りである（索引も「松風」で立項している）。

生年は、右の『新選俳諧年表』より逆算すると、享保十七年（一七三二）ということになる。俳諧関係の編著としては、『浦の賀』（明和七年刊）、『花すし』（安永九年刊）、『俳諧こたつや』（寛政六年刊）、『去年の夢』（享和元年刊）、『傘狂責』（寛政六年刊）、『俳諧百画賛』（文化十三年刊）、等が知られている（『国書総目録』参照）。五筑坊門とあるので、美濃派系の俳人である。『正風発句大概』が、藤原定家の『詠歌大概』に倣ったものであることも、右の序文からわかる。槐亭風後の文箱の中にあった『正風発句大概』草稿を、これも紀州の槐亭門（『新選俳諧年表』参照）の紅蓼舎風察が見出し、校合し、書肆橘屋治兵衛のところから出版したというわけである。「天明丙午」は、天明六年（一七七七）である。続いて、奥付部分に記されている跋文ともいべきものを翻刻してみる。

察（筆者注・風察）簡云、此書者、以註解而為主、則本文者畢竟目錄也焉、殊爾教誠之書也、則強而不可論文章之花実、與所見人其惟察之好。

とある。序文と同じく、風察によって記されている。要は、『正風発句大概』は、本文そのものよりも、註解（細字で二行割りに書かれている）の方に力点が置かれているのであり、本文そのものは、目錄のようなものだといふのである。

そこで、なにはともあれ、句読点、濁点、振り仮名等を付して全文を翻刻してみる。印刷の都合を考え、註解部分を、本文よりも二字下げて翻刻しておく。天明六年というと、天明四年刊の『蕪村句集』をはじめ、前後して、個人発句集が陸續と出版されており、俳人間に発句（今の俳句に繋がるもの）意識が高まっていたであろうから、そこにおいて「発句とは何か」を追求した本書は、時宜を得た出版として、その内容と相俟って、大いに注目されたものと思われる。翻刻の後で、内容の検討に入っていくたい。

二 『正風発句大概』翻刻

①夫、正風の発句を作る法は、

正風は、もと和歌の風脉にて、和歌より出たる名目なり。

②先、心鏡を清浄にして、工案すべし。

名欲の私に覆はれ、妄想の塵に埋れて、心鏡曇るときは、求るに句なし。心鏡清浄なれば、万象あきらかに移て、ことごとく正風の姿なるべし。

③季節、切字はさらにして、

季節は陰陽の変相にして、風雅の本なり。風雅は飛花落葉の観想より、其情の内に余て、五七の言の葉とはなれる。歌には雑の部、恋の部などあれど、発

④第一、埒明らかに、

句は文字数すくなきゆへに、季節なくては言語の片端のみにて、風雅の優情なし。依て季節を入れる事なり。委は口伝。○切字は、物の差別なり。差別とは、是はそれ、夫は是ぞと落着して、詞の始末をとふ事也。其差別する手爾葉を名づけて切字といふ。其仮名は、治定、疑、下知、挨拶、助字也。其外、三段切といひ、二段といひ、或は詞を残し、或は心を残し、又は定りたる切字なくとも、心に差別のあるものは、心切とて切るなり。歌は上下の二句を合て一首となり、詩は起結の四句を合て一篇となる。然に、発句は、五七にして、歌の上の一句なれば、其一句を差別して、二句一章となすゆへに、発句には切字の入用ある也。口伝。

詞の次第乱す手爾葉の紛なく、徹上徹下とて、句意あき透て、いさゝか不埒を言ず、尼入道の耳にも能聞ゆるをいふ。聞ぬ事には鬼神も感ぜられず、猛きものゝふも心を和らげがたとぞ。近頃、或集に「漕ほどの門に川ありといふ句あり。座五の詞は忘れ侍る。此句、こぐほどの門とはいかなる門にや。其いふ不埒にして、連歌にては是を首切レといふ。さるは、漕ほどの川とつゞくべきを、其中を切て門の字を入たればなり。

⑤姿を先にし、情を後にす。

古代の俳諧は、たゞ情をのみ論じて、姿の沙汰は曾てなし。当流は姿を先にして、眼に見る風姿とゝなはぬは、正風の発句にあらず。されば、翁の法語にも、目にて俳諧を見るべし、耳にて俳諧を聞べからず、とあり。目にて見るは姿にて、耳にて聞は情なればなり。翁の歳旦に「蓬萊に聞ばや伊勢のはつ便り、此句、上五を元日にと案じられしが、例の目に見る姿なきゆへに、蓬萊とは改られしとぞ。又、或人の「手洗湯のまたなつかしき梅の花、といへるを翁の判に、またなつかしきは情にして、一句の姿とゝなはずとて、竹椽青しと直されけるとぞ。尤、和歌も風姿を大事にすることゝて「さゝ波や真野ゝ入江に駒とめてひらの高根の花を見るかな、此歌は、風姿を能^{よく}よみかなへたるとて秀歌なるよし、誠に此歌を吟ずれば、則、頼政の烏帽子、狩衣にて鞍の前輪に手綱をひかへ、比良の高根を見やりたる姿、目にかべり。又、西行の「山人に花さきぬやとたづぬればいさ白雲とこたへてぞ行、此歌を聞けば、頬かぶりしたる男の薪を担ながら、後えの峯を見かへりたる姿、言外にみゆるなり。扱又、言語の姿とていさゝかの詞にも姿の吟味はあるべき事也。たとへば、あら暑し、といへば、肩を脱ぎ、膝をまくり下

⑥聊^{いささか}も自己の塩梅^{あんばい}を加へず、造化の無味を樂しみ、人作の理屈をはなれ、自然の道理にしたがふ。

品の姿なり。いと寒しといへば、何とやら常陸の宮の皮衣もおもひ出て、上臈の姿にこそ。さるは、あらといひ、いとゝいふ助語の変なり。姿は口伝。○情は余情とて、言外にあるものなり。姿さへそなへば、情はおのづから待るものなり。餘情とは「古池や蛙飛こむ水の音、始終の句法あり。口伝。聊^{いささか}も自己の塩梅^{あんばい}を加へず、造化の無味を樂しみ、人作の理屈をはなれ、自然の道理にしたがふ。正風の俳諧は、翁の塩梅せる道にはあらず。本よりの天理にて、翁は其理に由て此道を興せる人なり。正風は造花にまかせて自己の塩梅を加ふべからず。自己を加へざれば天理にして私なく、自己は即造化にて、造化は即自己なるゆへ、雨を祈れば天の河をもせきくだし、晴を願へば吹上の神も和合の光を添る筈也。○無味とは、禪語の没滋味にして、其塩梅を加へざる本来の味也。○道理と理屈の差別といふは、たとへば、「凍消浪洗旧苔髭、此句は名高き作ながら、人作の理屈也。池塘春草生、此句は自然の道理にて少も理屈なし。此故に古今の名句也とぞ。又、「山／＼の高根／＼あつたひ来てふじのすそ野にかゝるしら雲、是は理屈なり。な／＼に雲よりうへはいさしらず見ゆるばかりも高き山かな、是は道理なり。すべて理屈は工みにして、かな

らず風姿なく、道理は拙にして、全く姿なり。夏の夜は山鳥の首に明にけり、是は理屈なり。夏の夜や崩れて明し冷し物、是は道理底なり。口伝
⑦趣向と句作の差別あれば、駄と用とは紛れざる事をおもへ。

趣向には新古なし。新古は句作による事なり。富士をいさ山の端にせんけふの月、此句、名月に富士山とおもひよせたるは趣向なり、山の端にせんとは句作也。されば、名月に富士とは古めかし事なれども、山のはにせんといふにて新味とはなれり。○駄用の紛た時は、傍題の難あり。たとへば、鶯の我ものにして梅の花、とすれば、鶯が駄にて梅は用也。鶯をとすれば、鶯が用となりて、梅の句となるなり。如此、一字の仮名にて表裏の違ひとなれば、返くも恐るべきは手爾於葉の紛也。

⑧安く素直なる所に、只一作のみ、二作を重す。

正風の句は徒言に似て、いさゝか一作あるものなり。或人、俳諧と徒言とのけちめを尋しに、獅子道人の曰、物喰へば暑うなるといふが俳諧なり、腹の大きなといふは徒言也と。又、即席に、へ簾ごし向の人を涼かな、と論し申されけるとぞ。二作を重すとは、むかし、其角が句を評して、翁の曰、二作なるときは平話を失ひ、三作なる時は俳諧尽て終には自

己をも失ふべしとぞ。二作はへ既望や龍眼肉のから衣、三作はへ轆たつ長者の夢や黒牡丹の類也。
⑨地を専らとして、強て曲節を求むべからず。

たとへば、糸竹の謡物とても、むつかしき節の所は、一夜か二夜にて覚ゆべけれど、其地といふ所は十年の骨折ならでは、人も感ぜずとぞ。へ声枯て猿の齒白し峯の月、此句は外にて巫峡の曉を写し、内には断腸の情を含て、例に晋子が作ながら、此場は一夜の工夫を凝さば、誰も案じ得べけれど、翁のへ塩鯛の齒ぐきも寒し魚の店は、何も工夫も見へず、尼も入道も知たる事にてさして曲も、節もなければ、魚の店の五文字には、例の風姿を尽して名人わざなれば、二十年の骨折ても此地の所は得がたかるべしとぞ。委は口伝。○曲は色のごとし。へ初霜や麦まぐ土のうら表、此裏表といふ所が曲也。節は句のごとし。へ静さや鮠飛ぶ春の夕日川、此しづかさやといふ所に節あり。されば曲節は文章の色香にたとへて、花はまして、人も色香のおくれたらんは、何か見所あらん。さはとて、牡丹の花のけやけきよりは、桜の色香のうすらかならむこそ、兵部卿の句ひ過たるよりは、大将の薫のぼらんこそ、あかづなつかしからんをや。爰に強ての一字を見るべし。

⑩尤も、平話にてし、雅言のぬめりと、俗語のいやみを嫌ふ。

平話とは、漢に媚ず、和にぬめらず、たと平生の詞なり。山家集の歌、杜律の五言、多くは平話也。翁常に此二集を枕とせるよし。十論に、西行の富士の歌を評して、風になびくはぬめりて上手の場。駿河なるは平話にして名人の場なるとぞ。○雅言は大和詞にて、物語、和歌などの艶詞也。尤、雅言は入用なれども、そのぬめりを嫌ふ事也。たとへば、鶏をくだかけといひ、豆腐をおかべといふ類也。猶、亦細かにいふときは、行燈は平話なれども、ともしびは雅言にて、おほとなぶらはぬめりなり。されば、俳諧は味噌漬の風雅を述べ中人以下の人をいざなふものなれば、和歌、物語の艶詞などは、畢竟僭上に似て、言行の喜びあればなり。○俗語は、俳諧の日用なれども、いやみとは、面白いといふを面くろいといふがごとき、或は、遊所の文等の詞に粹の野父のといふごとき、又は、当時のやはり詞にあらひ、まづいのごとき類なり。

⑪実なる時は虚にほどこき、虚なるときは実にしづめて、儒は、実を表に教て、虚を裏に捌き、仏は虚を外に説て、実を内に閑めず。虚実は諸道の姿にして、先後は家／＼の連派也。是を自在に説くものは、俳諧の世法なり。実なるときは虚にほどくとは、たとへば、磯山の桜ゆするな浪の音へ是ほどはぬれても

嬉し初時雨、此二句は連歌の実なり。さるを桜をゆするとし、ぬれてもまゝよとすれば俳諧の虚となるなり。然ども、虚のみにて実なきは、又、荏老の虚誕に落、或は言語の口先となりて、風雅の実を失ふべければ、実にしづめてとはいふなり。たとへば、闇の夜や巢をまどはして鳴く千鳥、此句、巢を失ふて、とか、尋ねてや、など例の平話に言つづけては、いさゝかも面白き所なかるべし。さるをまどはして、と実にしづめたるにて、感情少なからず。砧打て我に聞せよや坊が妻、といふ句も、やの字を添へたるにて、発句には成りし。若、此やの字なくば、浮虚にして、徒言なり。委は口伝。

⑫文質彬々として、俗中の雅を忘べからず。

文質は、則花実にして、花実は則虚実也。口に扱ふを花実といひ、心にさばくを虚実といふとぞ。○俳諧は俗談平話を以て味噌漬の世情に遊べば、彼いふ質がちにて、先は野なるものなれば、こゝろの風雅をたしなむべきなり。

⑬不易流行の躰、真行草の品あり。

不易とは、門松や左右へわかるゝ御万歳、流行とは、髪ゆひの床にあはしや御万歳、是は落柿舎の説なり。委は東花西花の両集にあり。○三足猿といふ集に真行草の俳諧あり。其発句に真へ岩に花猿の物

おもふ所なり、行へ猿の手の及ぬ空や郭公、草へ俳諧は真かう赤し猿の尻、とあり。爰に又、虚実を論ずれば、真は実中虚、行は虚中実、草は虚中虚ならん。但、実中実とは俳諧にあらずと言はん。委は口伝。⑭雑といひ、無季といひ、名所の格といふもありて、各其軀をわかつ。

雑とは、へ嬉しさもうさも浮世の鶉の字かな、へ虚も答へ実もこたへて衍哉、無季とはへ年へや猿に着たるさるの面、如此類也。口伝。○名所の句は季節なくとも然らんとぞ、へかちならば杖つき坂を落馬哉へ歌書よりも軍書になし吉野山、名所の格といふものは、たとひ季を持つ物といへども、其句に其季の用をなさねば雑の軀に同じ、へかたつぶり角ふりわけよ須磨あかし、くはしくは口伝。

⑮奉納、法楽、感瑞、夢、

奉納といふ時は、神祇の句に限らず、たゞ常の題句にても神仏に奉る事なり。法楽といふときは、決て其神、其仏の威徳を述たる句なり。古法に韵をつなぐことあれば、当流にても古法にしたがふ事とぞ、へ梅さくら松は御前に夏の月、是は獅子老人、天満宮の法楽にて、アカサタナの韵なり。又、首尾の韵あり、へ何の木の花としらずも句かな、是は翁の神法楽也。古き句にも、へあなとうと春日のみがく玉

津島、くはしくは口伝。○夢想の句は、神詠の心にて、夢ぬし其眼をとゝなへて、其俳席には聖像を掛けて、神酒、献香等あるべし。其式は爰に略す。

⑯餞別、

追善、追悼には、いさゝか心得あるべけれ。

餞別は、行程の遠近、年月の多少、其人の生涯によりて、其情も、又、ひとしからぬは、定れる格もなし、へ麦の穂をちからに抓む別かな、へ梅若菜まりこの宿のとろゝ汁、へ其花の咲てや烏藤三百里、多く挙るに及ばず。餞別に限らず、すべて贈答の句は、地歩をゐるといふ事ありて、人を崇るも、己を卑下するも、其分に應じて、過分の挨拶はせぬものとぞ。

○追善、追悼は、同じ品ながら、追善は其霊を慰め、追悼は、己の哀傷を述るなるべし。去ながら、通して追善とはいふなり、へ当帰より哀れは塚の葦草、へ死に來て其きさらぎの花の陰、かくのごとく切字を入れざる事、追善の格なり。委は口伝にあり。扱、追善には親疎あり、遠近あれば、其品、其程に應ずべきなり。たとへば、三十三回、五十年忌などに前後不覚の愁歎もなければ、百回忌などは却てめでたき意味も有べし。すべて、今日の世情にかはらぬは、遠忌の追善に袖をしぼるなどいふ句は、言行の違ひを恥べき事とぞ。

⑰新宅、諸祝儀、賀は、まして、

新宅の会、わたましの祝ひなどは、常の挨拶に替事なく、火の字は勿論、緋ざくらも、薫物といひ、焦るゝといひ、草の萌も、水のけぶるも、必忌べき事なるが、たとひ其事ならずとも、仮名のつゞきに心をつくべきとぞ。たとへば、三井寺の門たゝかはやけふの月、此句には焼ふのつゞきあり。如此の類なり。又、或人の新宅にて、六吟の俳諧ありしに、其時、其前書の中に此会六吟のといふ詞あり。回録のひゞきいかゞとて、此会や六吟のと、やの字を入たる事も侍りき。能く穿鑿すべき事也。此外、いづれの祝言とても、皆此例によるべければ、ことごとく挙るに及ばず。爰に、又、或人の句にへきのふまでそよぎし笹を粽哉、此句忌べき詞はなけれども、哀傷の吟声あれば佳節の句にはいかゞと、蘆元坊の難ぜられしとぞ。近此もさる難あり。或人の、三月尽に松に藤衣かえるも今一夜、と暮春の姿情を尽されしが、藤衣は喪の服なれば、此句、今一夜にて服を除くといふ喪中の俳あれば、いかゞと難じ侍き。○誕辰の賀は、限りなき寿きを述て、一字一点の難なきやうに整る事なれば、容易に其句を極むべからず。我句は、己が情に紛て見へがたきものなれば、必人にも見合せすべき事とぞ。或人、六十の賀に心の春千代突く杖をいざ伐ん、此句、見

合せられしが、千代突くとは、尽るのひらきあれば、千代曳杖とせば然らんと申侍りしが、此作者は、能心得たる人なれども、かゝる見落しは、例に自作の紛といふべし。まして、初心の作者には不案の事どもまゝあるべし。たとへば、千代といふはめでたき祝言とのみ心得て、千代の春などいふ句あり。さるは千代の仕廻の春なれば、却て不吉の詞也。千代の始と言はざれば、ことぶきにはなりがたし。能く吟味すべき事とぞ。

⑱ たとひ面白からずとも、無難に祝言の整なはさして、作為を好むべからずとぞ。

其誕辰の当季をあしらい、一字一点の難なきやうに南山に比し、東海に寄せて限りなき寿を調へんとすれば、賀には面白き事はいはれぬ筈なり。去ながら、自身の賀は、ことぶくにも心持ありて、一作なからんは無下なるべし。

⑲ 是、当流発句の大概なり。若、五七五を指おる人の一助にもやと、肩衣のいとまある日、槐亭の半窓下に筆を浸して、くだくしき註解をさへ、まことに老婆の親切なるのみ。

三 『正風発句大概』注解

ここに、まず、右の翻刻の章段ごとに、私が便宜付し

た通し番号に従って、内容に立ち入らない程度に、最小限の注解を加えておく。

①「正風」に関しては、著者風後が「註解」（翻刻の二字下げの部分、以下同じ）において「正風は、もと和歌の風軌にて、和歌より出たる名目なり」と記しているように、例えば、寛文元年（一六六一）刊本のある細川幽斎の口述を烏丸光広が筆記した歌論書『耳底記』に「先づ正風体を本とすべきなり。正風体をよみすうれば、後にはいかやうにもなるなり」と見えるごとくである。

④の「註解」に見える「聞ぬ事には鬼神も感ぜられず、猛きものゝふも心を和らげがたとぞ」は、言うまでもなく、『古今和歌集』仮名序の「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ……猛き武士の心をも慰むるは歌なり」を踏まえての発言。〈漕ほどの〉の句は、出典未詳。

⑤の「註解」で芭蕉（翁）の言として掲出されている「目にて俳諧を見るべし、耳にて俳諧を聞べからず」は、『正風発句大概』以前の諸俳書には見えない。ただ、同内容の遺語は、『二十五箇條』の「都て発句とても付句とても、目を閉て眼前に見るべし」他、多出する。〈蓬萊に〉の芭蕉句は、元禄七年（一六九四）、五十一歳の折の歳旦句。芭蕉に纏わる〈手洗湯の〉の句にかかわるエピソードは、信杖坊許虹の俳論書『俳諧衆議』（宝曆

七年刊）に見える。〈さぶ波や〉の頼政歌は、『新続古今集』等では、〈近江路やまの浜辺に駒とめて比良の高嶺の花を見るかな〉。其角の俳論書『雑談集』（元禄五年刊）は、本書と同様の歌形、当時よりこの歌形が流布したのであらう。〈山人に〉の西行歌は、『聞書集』所収。当時、流布していたのであらう。〈古池や〉の芭蕉句は、貞享三年（一六八六）、四十三歳の折の作品と考えられているが、疑問もある（拙著『芭蕉古池伝説』昭和63年、大修館書店、参照）。〈古池や〉句にかかわつての「始終」の論は、支考の『俳諧十論』（第九変化ノ論）（享保四年刊）に見える。

⑥の「註解」中の「凍消浪洗旧苔髭」は、『和漢朗詠集』巻上の都良香の「気霧風梳新柳髪 水消浪洗舊苔鬚」を指し、「池塘春草生」は、宋の謝靈運の「登池上楼詩」中の「池塘生春草 園柳變鳴禽」を指している。また、〈山く〉の〈なかく〉にの両歌は、支考の俳論書『続五論』（元禄十二年刊）に見え、先の歌を「娵情の理」、後の歌を「娵情のま」としてあり、風後は、これによつたものであらうが、和歌そのものの出典は未詳。あるいは、支考自らの作か。〈夏の夜は〉の句は、初案は、不卜編『江戸広小路』（延宝六年刊）、言水編『江戸蛇之鮓』（延宝七年刊）等に所収の〈夏の夜は山鳥の首明にけり〉で、言水の作。後に、言水編『初心もと柏』（

享保二年刊)に、「短夜」の前書を付して本書のごとく
「夏の夜は山鳥の首に明にけり」の句形で見える。言水
自身が「賢鳥の寝姿首短し」と注しているので、一句の
意味は、明らか。風後が「理屈」と言う所以(ゆゑ)であろう。
「夏の夜や」の句は、元禄七年(一六九四)成立の芭蕉
句。

⑦の「注解」に見える「富士をいさ」の句は、里紅編
『文星観』(享保十七年)所収の支考の作品。「鶯の」
「鶯を」は、風後によるか。

⑧の「注解」中の獅子道人(支考)のエピソードは、
支考の『梟日記』(元禄十二年刊)に「食喰へば腹のふ
くる」といふはたゞ言也。ねむしかあつしとかいふは
俳諧也。たとへば今宵この亭にかくのごときはしゐして
眼前の俳諧をいはむとならば、翠簾越にむかひの人の夕
すゝみ」と見える。風後は、かなりアレンジしている。
芭蕉が其角を評しての「二作なるときは平話を失ひ、三
作なるときは俳諧尽て終には自己をも失ふべし」との言の
出典は不詳であるが、同主旨のエピソードは、支考の『
東西夜話』(元禄十五年刊)に「翁の生前には、百句の中
二、三句ほどは、作に作をかさねたれど、世の人も耳め
づらしく、晋子は作者なりといへり。(中略)先師滅後
はその作にます／＼長じて、あるいは二作三作におよぶ
と見える。〈既望や〉の句は、梅員編『岨のふる烟』(

元禄十六年刊)に「十夜や龍眼にくのから衣」と見える
其角の句。〈幟たつ〉も旨原編『五元集拾遺』(延享四
年刊)に見える其角の句。この二句がそれぞれ「二作」
「三作」であることは、支考の俳論書『十論為弁抄』(享
保十年刊)に見える。

⑨の「註解」に見える「声枯て」は其角句、〈塩鯛の〉
は、芭蕉句。其角編『句兄弟』(元禄七年刊)において
両句が比較、検討されている。〈初霜や〉は、李由・許
六編『韻塞』(元禄十年刊)所収の北枝の句。〈静さや〉
は、不詳。

⑩の「註解」中の「十論」は、支考の俳論書『俳諧十
論』(享保四年刊)のこと。西行の「風になびく」は、
「風になびく富士のけぶりの空に消えて行方も知らぬわ
が思ひかな」(『新古今和歌集』)。「駿河なる」の歌
は、不詳。あるいは、『西行物語』に語られる「風にな
びく」と対になっている「いづとなき思ひは富士の煙に
てまどろむほどや浮島が原」の間違いか。この両歌に纏
わるエピソード、『俳諧十論』には見えない。

⑪の「註解」中の「磯山の」は、莊丹の『芭蕉句解参
考』(文化四年刊)に「磯山や桜をゆする波の音」との
句形で芭蕉句として掲げられているが、存疑句。〈是は
どは〉は不詳。〈闇の夜や〉は、元禄四年(一六九二)
成立の芭蕉句。〈砧打て〉も、貞享元年(一六八四)成

立の芭蕉句。

⑬の「註解」中の〈門松や〉〈髪ゆひの〉の二句は、
宇中・支考編『夜話ぐるひ』（宝永元年刊）の中に、それ
ぞれ〈万歳や左右にひらいて松の陰〉〈髪結の床にえ
ぼしや万歳楽〉の句形で見え、「不易」「流行」の句と
されている。風後流にアレنجされているのであろう。
「落柿舎」は去來のこと。ただし、去來にこの句にか
わっての言説はない。「東花西花の両集」は、支考編の
『東華集』（元禄十三年刊）、『西華集』（元禄十二年
刊）のこと。「不易」「流行」の視点より俳諧作品が論
じられている。『三疋猿』は、支考編、宝永元年（一七
〇四）刊の俳諧撰集。〈岩に花〉は「真体」の涼菟発句、
〈猿の手の〉は「行体」の涼菟発句、〈俳諧は〉は「草
体」の涼菟発句である。

⑭の「註解」中の〈嬉しさも〉は、支考著『俳諧古今
抄』（享保十五年刊）所収の支考句。〈虚も答へ〉の句
の出典は、未詳。〈年々や〉は、元禄六年（一六九三）、
〈かちならば〉は、貞享四年（一六八七）、〈かたつぶ
り〉は、元禄元年（一六八八）成立の芭蕉句。〈歌書よ
りも〉は、『俳諧古今抄』所収の支考句。吾仲編『梅の
わかれ』（正徳五年刊）では、上五〈歌書よりは〉。

⑮の「註解」中の〈梅さくら〉の句は、『俳諧古今抄』
に「賀の金城にて、聖廟の法案に、梅さくら松は御前に

夏の月とは、御詠の和歌を飄転して、梅はとび桜は枯れ
たれど、松は今更つれなからで、月の清涼を添へたれば
と、宝前のけしきを称したらん」と見える。支考句か。
〈何の木〉は、元禄元年（一六八八）成立の芭蕉句。
〈あなとうと〉の句については、来雪庵後素堂著『奥の
ほそ道解』（天明七年刊）に芭蕉の〈あら尊青葉若葉の
日の光り〉にかかわって、「連歌大回しの句に〈あな尊
春の日みがく玉津島、といへる〉と見える。連歌書に頻
出。宗硯の連歌論書『密伝抄』によれば〈あなたふと春
日にみがく玉つ嶋〉の句形で、周阿の作。

⑯の「註解」中の〈麦の穂を〉は、元禄七年（一六九
四）の、〈梅若菜〉は、元禄三年（一六九〇）の、〈当
帰より〉は、元禄六年（一六九三）の芭蕉の作品。〈其
花の〉は、『藤の首途』（享保十六年刊）、〈死に来て〉
は、『本朝文鑑』（享保三年刊）所収の、支考句。ただ
し、〈死に来て〉、『笈日記』（元禄八年刊）では、
しにゝ来てその二月の花の時〉。

⑰の「註解」中の〈三井寺の〉は、元禄四年（一六九
一）成立の芭蕉句。〈きのふまで〉〈松に藤〉〈心の春
の三句については、作者、出典等、未詳。

四 『正風発句大概』の発句本質論

以上、未解決な箇所を少なからず残しながらも、『正

『風発句大概』全体に注解を加える作業が終ったので、小稿のまとめを兼ねて、本質論的視点より少しく検討を加えてみることにしたい。

『正風発句大概』の著者槐亭風後が、美濃派の四世五筑坊（安永八年没、八十一歳、五竹坊）の弟子であると指摘してゐるのは、平林鳳二・大西一外著『新選俳諧年表』であつたが、紛れもなく美濃派系の俳人であつたことは、本文を一読することによって明らかであらうし、右に私が試みた注解によって、より闡明になったかと思われる。その辺を整理しておく。

まず、通し番号⑧の「註解」部分に、「獅子道人」各務支考が登場する。通し番号⑩の「註解」部分に登場する蘆元坊（延享四年没、六十歳）は、美濃派の三世である。例句においても「富士をいさ山の端にせんけふの月」（⑦）、「嬉しさもうさも浮世の鶉の字かな」（⑭）、「歌書よりも軍書にかなし吉野山」（⑭）、「其花の咲てや烏藤三百里」（⑭）、「死に來て其きさらぎの花の陰」（⑭）等、折にふれて支考作品が用いられている。また、通し番号⑩に見える『俳諧十論』、⑬に見える『東華集』『西華集』『三足猿』の三つの美濃派の俳書をはじめとして、私が右の注解で明らかにしたように、その論述にあたつては、『俳諧衆議』（⑤）、『俳諧十論』（⑤）、『続五論』（⑥）、『文星観』（⑦）、『泉日

記』（⑧）、『東西夜話』（⑧）、『十論為弁抄』（⑧）『夜話ぐるひ』（⑬）、『俳諧古今抄』（⑭⑮）、『藤の首途』（⑮）、『本朝文鑑』（⑮）等、多くの美濃派系の句集、俳論書が援用されているのである。

そのような点から言えば、俳論書としての『正風発句大概』は、先行する美濃派系諸俳論書の綴れ織りのごとき観を呈しており、オリジナリティーは、きわめて稀薄と言える。が、先にも記したように、天明四年（一七八四）刊の『蕪村句集』、あるいは、その前年、天明三年の『鬼貫発句集』、そして、天明五年の『杉風句集』と、実作、鑑賞、二つながら発句（地発句）意識高揚のさ中であつて、発句のみに焦点を合わせての一書がまとめられたことは、大いに注目されてよいであらう。

通し番号⑤の注解ですでに指摘したように、ほぼ同時代の美濃派系（と限定しなくてもよいのであるが）の俳論書を繙くと、例えば、風後披見の宝暦七年（一七五七）刊、信杖坊許虹の『俳諧衆議』においても、巻頭に左のごとく発句の条を掲げてはいるが、『正風発句大概』は、発句のみで一書を成したということであらう。ここでは、参考までに、しばらく信杖坊許虹の発句論に耳を傾けてみることにする。

発句之事

発句は、一気発動の所よりなりて、自然にして其国

の風あり、其所の風あり、まして其人の氣風ありて一ツならず。しかるに芭蕉翁にいたりて、其道をきはめ、其法を定るに、其句は事物の姿を先にして、自己の情を後にす。我党是を學びて、俳諧はこゝろの遊びなるを知る。我師のいへり、発句は、高翁の句に習ひて、他に求ずとぞ。昔し、或人の句に、

手洗湯のまたなつかしき梅の花

といへるに、翁の筆を添たまひて、

手洗湯に竹椽青し梅の花

発句は、何れも梅の寒きをいゝながら、またなつかしきは、情すゝみて、一句の姿とゝなはず。竹椽青しは、寒き姿にして言外の余情、いまだ余寒の氣色も見へたり。

かくのごとくである。芭蕉を、以後の発句の源流に位置付けているのは、注目してよい。もっとも、美濃派系の作句理念である「姿先情後」にかかわつてのこの発句論も、次に「協之事」を受けるのであるから、あくまでも俳諧（連句）の発句ということである。

ほぼ『正風発句大概』と同時期、翌天明七年（一七八七）に刊行されている、これも、発句のみに焦点を合わせたものに、雪中庵蓼太の『発句小鏡』がある。当時の俳人達の発句意識が、このような書を風雪系の俳人蓼太をして書かしめたのであらうが、中に「言葉古く、心新

しく案べし」との言が見えることから窺知し得るごとく、当然、先行の『正風発句大概』が意識されているよう。両書に共通するところ少なくないが、『正風発句大概』が論にややウェイトが置かれているのに対して、『発句小鏡』の方は、やや作品例にウェイトが置かれているといった違いが見られる。当時の実作者（俳人）が、流派にこだわらなかつたとするならば、両々相俟つて、恰好な発句入門書ということであつたであらう。

そこで、いよいよ『正風発句大概』の内容の検討に入るが、表現論とも言うべき「季節、切字」論（③）に目を通す時、今日の俳句にも目配りをしつつ目を通していくならば、「発句は文字数すくなきゆへに、季節なくては言語の片端のみにて、風雅の優情なし」との、今日のいわゆる有季にかかわつての発言などは、大いに注目してよいのではなからうか（あるいは、このような考え方にも、すでに先蹤があるのかもしれない）。不十分ながらも、季語（季節）の必要性を真正面から語っているのである。切字に関して「物の差別なり」と規定することは、はやく支考の俳論書『二十五箇條』（享保十一年刊）を源流とする。「発句の切字といふは、差別の心なり。物は其じやによつて是じやと埒明くるなり」と記されている。風後の切字論は、よく咀嚼されていて、わかりやすいものとなっている。そこにおいて展開されている「

差別」と「心切」とをからめての見解も、興味深い切字論ではあるが、すでに、風後の師、五筑坊（五竹坊）琴左の俳論書『十二夜話』（成立不詳、写本で伝わる）に「切字は差別のために可用ため也」とするべし。自己に差別さへわかりたらば、何ぞ切字の格になづまんや。心切の事を伺ふに、師（筆者注・支考）曰、いざうらば雪見にころぶ所まで、此句にて可考。いざゆかん雪見にころぶ所まで、にてすむ句也。されど、いざうらばとなければ発句に娑情の幽玄なし。此いざうらばといふに通ひて、内に行んといへる差別あれば心の切とはいふ也」と見えるところである。この支考の「心切」を溯ったところに、芭蕉の言「切字に用る時は、四十八字皆切字也。用ひざる時は、一字も切字なし」（『去来抄』へ故実）が想定されるのである。

続いて論じられている「娑先情後」の論は、美濃派俳論の枢要に位置する表現論であり、「道理」「理屈」の論とからめて、すでに、堀切実氏の『蕉風俳論の研究』（明治書院、昭和57年刊）において詳しい検討がなされている。ここでは、参考までに支考の『二十五箇條』中の「発句像やうの事」の全文を引いておく。

発句は屏風の画と思ふべし。己が句を作りて目を閉、画に準らへて見るべし。死活をのづからあらはるゝものなり。此ゆへに、俳かいは姿を先にして心を後

にするとなり。都て発句とても付句とても、目を閉て眼前に見るべし。心に思ひはかつてするは、見ぬ事の推量なり。目に見て付ると、心に量て付ると、自門、他門のさかひ、紙筆の上に尽がたし。諸集の付合を見て工夫すべし。

このような「娑先情後」の論から、付合論が徹底的に捨象されていたところに『正風発句大概』が成り立っているのである。しかして、この傾向は、言うまでもないことであるが、『正風発句大概』全体に見られるところである。ちなみに、蓼太の『発句小鏡』にも「発句は理屈より案ずべからず。理屈は勿論也。古人、句に絵をもてをしへ玉ふは、理屈を抜て、自然の風姿にうつさんがため也」との記述が見える。

以下、論は、「趣向と句作」、「地」「曲節」等の表現論、あるいは「不易流行」「真行草」等の本質論的表現論へと展開し、「雑」「無季」（この区別は面白い）、そして「奉納、法楽、感瑞、夢」「餞別、追善、追悼」「新宅、諸祝儀、賀」等の具体例が提示されて一文が閉じられているのであるが、ここでは、字中・支考編『夜話ぐるひ』中に見える「不易流行」にかかわる言説を紹介したあと、専ら「俗談平話」に焦点を合わせて、発句本質論的視点より検討を加えてみたい。

ある人のいへる、東花坊統五論に、俳諧の道明けし

といへども、此地のならばせに新古の論あり。たとへば、へ秋しるや大竹原を冷て行、といふ句はふるし。へ髪結の床にえほしや万歳楽、是等の句をあたらしといへり。此境如何。北花坊（筆者注・宇中）曰、それは新古の論にあらず。不易と流行と也。万歳の本情は、素袍あぼしの姿より、門松の間を出入てぞ五郎・十郎とも見られ、蝶鳥のたとへにもひくなる。すべて変化の上也。へ万歳や左右にひらいて松の陰、とは、是不易の証句ともいはん歟。髪結の床に烏帽子ぬぎて出立を繕ふさまも、一時の流行はあしからねど、是をあたらしと心にとゞむれば、虚実をしらぬ上気ものの部に落べし。先師も、此境に腸をさかれたれど、世に虚実を知れる人まれなれば、不易も流行も只眼前の新古にまよふのみ。おしむべき今の世也。

ここに、支考においては、「不易流行」論が、これも支考俳論の特色であり、『正風発句大概』においてもかなり詳しく言及されている（これから検討を加える「俗談平話」ともかかわっている）。「虚実」論とかかわっている様相を窺うことができるわけであるが、今は、深入りはしないことにする。右の一節が、風後においては、きわめてシンプルな形で紹介されているのである。「不易流行」論に限らず、複雑、難解な支考俳論が、『正風

発句大概」においては、風後自身が「五七五を指おる人の一助」と述べ、「老婆の親切」と述べるように、実作例とともに具体性を帯びつつ、限りなくシンプルな形にアレンジされているというのが、大きな特色として指摘し得るであろう。

「俗談平話」論の検討へと入っていく。

「俗談平話」論は、支考俳論の専売特許ではない。例えば、これも芭蕉の弟子である北枝が、元禄二年（一六八九）、「おくのほそ道」途次の芭蕉の俳諧談を書き留めたとされている『山中問答』には、

俳諧の姿は、俗談平話ながら、俗にして俗にあらず。平話にして平話にあらず。其境を知るべし。此境は初心に及ばずとぞ。

と見える。また、許六の『俳諧問答』〈俳諧自讀之論〉（元禄十一年成立）には、

俳諧、平話よろしといへ共、吟味とげての上を用ざる事は、つたなき事也。

との言が見える。土芳の『三冊子』〈へわすれみづ〉（元禄十五年成立）や、李由・許六の『宇陀の法師』（元禄十五年刊）にも、芭蕉の「俳諧は平話を用ゆ」との隻語が記録されている。が、各務虎雄氏が『俳文学研究』（文学社、昭和12年刊）において指摘しておられるごとく、もっとも熱心に説いたのは、やはり支考であった。そこ

で、支考の『二十五箇條』を繙いてみることにする。と、冒頭に置かれている「俳諧の道とする事」は、

ある人問曰、はいかいは、何のためにする事ぞや。

答曰、俗談、平話をたゞさむがためなり。
と書きはじめられているのである。

一方、『正風発句大概』において、最後は、「俗談平話」にかかわって、

尤、平話にして、雅言のぬめりと俗語のいやみを嫌ふ。実なる時は虚にほどき、虚なるときは実にしづめて、文質彬々として、俗中の雅を忘べからず。

と語り、この部分を三つに分けて「註解」を加えているのである。「註解」は、先行の支考俳論を参照しつつも、風後流に、より具体的に、より平明に語られており、よく「五七五を指おる人の一助」と成り得ている。「ぬめり」「いやみ」にかかわって、風後が参照したであろう支考の享保四年（一七一九）刊『俳諧十論』中の「第十法式ノ論」には左のごとく記されている。

今や我門の俳諧には、俳諧の心といふ物はあれど俳諧の詞といふ物はなし。たとへ筑波の躰をつくし、八雲の詞をかさぬとも、連歌と俳諧の姿は別なり。

此故に我家の点式には雅言のぬめりには俳諧の躰なしとも、俗語のいやみには俳諧にあらずとも、その両様を書わけよと新式に故翁の傍訓なり。爰に雅

言といひ俗語といひ、どちらも俳諧の公用なるに、ぬめりと、いやみとをそれが病ひとは、これらに俳諧の明日を察すべし。

この難解な支考の「ぬめり」「いやみ」の論が、風後にかかると、通し番号⑩の「註解」のごとく、豊富な具体例とともにきわめて平易に語られることになるのである。『正風発句大概』が、当時の多くの発句詠みの初心者に歓迎されたであろうことは、想像にかたくない。

最後に、『正風発句大概』と時期をほぼ同じくして、支考俳論書を敷衍解説した著作が何点か出版されているが、その中の一つ、安永二年（一七七三）刊、遊字庵些兮編『俳諧十論衆議拾遺』に見える「俗談平話」の論を左に掲げ、『正風発句大概』解説の一助とすることによって、この難解な稿を閉じることになしたい。

言葉かざらず、物の姿情をすぐさまにいふものは、今の俳諧なり。故に杜子美、西行の詩歌をもて正風躰の荷担人となり、或は雅言と俗語とをしれる風雅は、手爾遠波の事なれば也と。さるは、雅言の雅なるはいふにおよばず、俗語といへども、手爾葉のとりまわしにて、人の感ずる余情あれば、俗談平話も俗にあらず。爰に蕉門の俳諧は、雅俗一様の風流にして、学ぶ所は自然の正風躰なる事を知べし。然るに、我党の先輩にも、年経て久しく俳諧になれて、

我は虚実の扱さばきより、言語の理屈をはなれたるとおもひ、出まかせのすぐさまなるを正風鉢と覺へて、無味なだことの只言なるをしらざるあり。

これによって、通し番号⑩⑪⑫の「註解」部分において風後が言わんとしているところが、別の視点より照射されたことになるのであり、我々にとって美濃派系の俳人達にとつての「俗談平話」の意味するところが一段と明らかになったということである。

欄筆するにあたって、重複を厭わず結論めいたことを記しておくならば、当時の諸俳論書を繙くとき、あくまでも全体の中での一節として語られていた俳諧（連句）意識の中での発句論を、美濃派系の先行する諸俳論書を後ろ楯とすることによって、いちはやく発句のみに焦点を合わせて見事に語り尽くしたのが『正風発句大概』であったということになる。そして、それは、発句が、あくまでも発句として単独で詠まれるという時流の中で生まれたのであった。